美紗の会 たより

時は静かに埋み行くとも

西松　布咏

昨年はまさにコロナに始まりコロナに終わる年になりわが美紗の会もこの現象に振り回された日々であった。

振り返ると三月十四日の季節外れの雪が舞う人形町・よし梅での「春の愁いに華添えて」はコロナが拡散し始め前日まで混乱する中での覚悟の開催となった。その後も収まる気配はなく四月初旬に稽古場を閉鎖しリモートを通しての不自由な稽古に切り替えたり、テープによる自習をしながら次の会に向けて共に励まし合う日々であった。

然し乍ら赤坂クラブでの会を二度延期し、風前の灯となるかも…と一時は諦めかけた「五十九回美紗の会のつどい」をよし梅の女将の好意で密にならぬよう可能な限りの人数で行うことができた。

そして六十回記念演奏会の会場を必死で探す私の熱意を見兼ねて？神様が手を差し伸べて下さり神田明神の「令和の間」を拝借できることになった。嬉々とした日々の中での一筋の光に浴しコロナの不安をいっとき忘れる稽古に感謝し精進を重ねた。その間、会の直前に奥様の電話で知ることになった本郷公基氏の訃報は深い哀しみであった。

七月十九日に八十五歳で家族に見守られながら静かに「思い残すことは何もない」が最後の言葉だったと伺った。京都生まれのすらりとした東男の風情であられたが正義感の強い芯のブレない熱血漢で美紗の会四代目の会長を務めて下さった。邦楽音痴を自認しながらも日本芸術の粋を愛し常に冷静な見地で会の発展に尽くして下さった。その真摯なお人柄は花柳千壽文師と双璧する我が美紗の会のお手本であった。そのような哀しみと未だコロナ拡散が収まらない十一月二十九日穏やかな小春日和に恵まれ神主と巫女による昇殿参拝の後「第六十回記念演奏会」を無事終えることができた。コロナ渦中でもあり集客は見込めないと覚悟の上の開催であったが、遠来のお客様や思いがけない友人たちの応援もいただき和気藹々とした心に残る記念の佳き日となった。

そして十二月十九日の夕刻に始まったオンライン朗読スナック「雁」は、私の唄う「時は静かに埋み行く」で幕を閉じた。朗読は進藤昌子さん、山根基世さん。そして唄と三味線・西松布咏で鴎外の『雁』を不忍池を望む街から珠玉の「音」にして届けることが出来た。

私が『雁』と出会ったのは多感な高校生の時。薄幸でありながら健気に生きるお玉に惹かれ、いつかはこの物語を謳ってみたいと心の中に秘めていた。

今から三十三年前青山円形劇場で二回目のリサイタル【哀すれば唄】で藤富慶子さんの作詞を基に「忍ばずの女」を創作曲として舞踊と共に念願の演奏を果した。六歳で三味線と長唄を習い始め、古いしきたりの中をもがきながらの稽古は常に自分の行き方との葛藤であったから、最愛の父のために妾の生活に生きるお玉が、東大生岡田との出会いによって自我に目覚めてゆく心の変遷を我が事のように唄に託した。最後の言葉「忍ばずに生きたかりけり」は自分の心の叫びでもあったのだ。

爾来九年前は軽井沢・鶴間邸での薊の会で俳優・寺田農さんと朗読で共演。

七年前は高輪区民ホールの幻想的な舞台「月虹楽衣舞」で飯名尚人氏の演出で、舞踊・大野慶人。舞踊・花柳千壽文。ピアノ・辻隼人。の各氏と映像を交えて静かな月虹のように未来に生きるお玉を描いた。

そして二〇一七年五月二十日に鴎外の寓居「鴎外荘・舞姫の間」で「虹の会」を開催した。

新婚二年目に「舞姫」を執筆したこの座敷は、鴎外の「余ハ石見人森林太郎トシテ死セント欲ス」の遺言書が壁にかかっているので最後に鴎外を登場させ「忍ばずの女・忍ぶ男」と題し岡田と鴎外の二役を宮尾昌弘さんが演じた。そしてこの年末に図らずも我が美紗の会の福岡俊弘氏企画による「雁」のオ

ンライン朗読会で五度目の「忍ばずの女」の登場となったのである。

やはり「縁の糸」を思わずにはいられなかった。

私の人生は、思えばこそ…で三味線と共にここまで続けてこられたが、そこには沢山の方々との素晴らしい出会いがあり周囲の方々のお陰に恵まれたからこそ。そして今回はずっと憧れていた山根基世さんとの共演が図らずも実現したのだから。一つのことを続けたら見えないものがやがて見えてくる。これも長い三味線人生の中で学んだ言葉である。

若い頃はひたすらお玉を「忍ばずの女」として唄ってきたが、今回は鴎外の生きた時代と境遇。その中でもがき苦しみながら書き上げた「雁」の成り立ちに関心が移って行った。

一時中断しなんと三十五年経って語り部の僕の後日譚として最後の結末に至っているのはなぜか？

石見の藩医の息子に生まれ十二歳で東大医学部に入学し天才児ともてはやされ、母の妄愛に応えるべく苦悩し、その吐け口が文学であり執筆であったのだろうと思う。若くしてドイツに留学し欧州の近代文明を身につけた鴎外が未だ封建時代の最中にある日本に帰国し陸軍省の要職を全うし家長としての役目を負わねばならぬ重積の我が身を、岡田を知り忍ぶ女から忍ばずの女へと変身してゆくお玉に。お玉の気持を知りながら近代日本の学術・知識の世界を生きねばならぬエリートの岡田に、我が想いを忍ばせたのではあるまいか。一つの唄を唄い続けてゆくと新たなる発見があり、見えなかったものが少しずつ見えてくる。今回のオンライン朗読会を終えてその想いを新たにした。

五月にやむなく閉館に追い込まれた『水月ホテル鴎外荘』の今後がずっと心に掛かっていたが、ネット募金のお陰で修繕費が集まり今年の一月には再開の予定とのお知らせを女将の中村みさこさんから伺った。困難なことが起こっても忍ばずに生きてゆけばきっと明るい兆しが見えてくる！と嬉しく思った。

コロナ拡散の中で、ともすると何事も自粛しなければ…と否定的になってしまう令和二年であったが美紗の会の日々の稽古を通して、音を楽しむ。生きるを愉しむ。を忘れずに歩み続けてゆきたい。

時は静かに埋み行くとも、新しき年はまた良きことが巡りくると信じて忍ばずに生きたいと想う。

「美紗の会第六十回記念演奏会を終えて ——それぞれの戦い」

己紗 悠咏

去る二〇二〇年十一月二十九日好天の日曜日、神田明神・文化交流館にて「美紗の会のつどい 第六十回記念演奏会」が無事開催された。この会の開催に至るまでのこの一年はただならぬものであった。思い返せば二〇二〇年二月頃より目に見えぬ敵「新型コロナウイルス」がひたひたと私たちの日常生活の中に忍び込んできた。いつどこで感染するかもわからず、「手洗い・アルコール消毒」「マスク」「密を避ける」を金科玉条として「自粛」。世の中のほとんど全ての会合が中止か延期になった。御多分に漏れず四月二十五日に予定されていた「第五十九回美紗の会つどい」も延期になった。

「延期？」と聞いて「なぜ、中止にしないのだろう？」と思ったのは私だけではないと思う。

布咏師匠に冗談で『五十九回を中止にしないのは、十一月の記念会が六十回にならないからですか？』と伺ったことがあった。師匠は真顔で「そうよ」と即答された。師匠の六十回記念演奏会開催に対する

並々ならぬ覚悟が見て取れた。

五月からは慣れない zoom でのお稽古。余談だが zoom という言葉は一月に知ったのだが、私には一生関係ないと思っていた。ところがこの事態で否応なく使わざるを得なくなった。まあこれはコロナのおかげである。このオンラインでのお稽古を可能にしたのはＩＴに従事するお弟子さんたち（俊咏さんや咏治さん達）の尽力である。しかし私には zoom でのお稽古はなじまず、小唄の「間」が大きな「隙間」になってしまい数回で断念した。

どうなるかと危ぶんでいた「第五十九回美紗の会のつどい」は二〇二〇年七月十一日（土）日本橋人形町「よし梅　芳町亭」で開催された。唄はアクリル板を前に、糸はマスク着用、観客ももちろんマスク着用、弟子以外の観客はなし、余分なおしゃべりは控えるという対策を講じて開催された。会のあとの食事会も豪華お弁当を六人ずつくらいのグループで別室で食べるという形式で行われた。参加者はいつもよりは少なかったが充実した会だった。

私は開催に対しては内心批判的であったが、会合が皆無で閉塞した生活を送っていた中でのこの会は大変リフレッシュになった。（本当に現金なものだ）しかしもっと深刻なそれぞれの事情で参加が叶わなかった方々も多かった。医療従事者でも大学病院で毎日危険にさらされている三浦先生や病院・老健施設を沼津に持つ弥咏さんなどは私には計り知れない苦悩を抱えて日々生活している。また、高齢や持病で家族から外出を止められている、家族に高齢な方、持病を持つ方がいて外出を控えざるを得ないなどそれぞれが違う状況でコロナ感染の蔓延と戦っていることを痛感させられた。残念なことに弥咏さんは苦渋の決断の末八月で美紗の会を退会した。これはコロナのせいである。

『五十九回』終了後は『六十回』へ向かいまっしぐら。お稽古は social distance をとり横並びマスク着用でリアルで行うようになった。

コロナは終息するどころか日々感染者が増加していたが、十一月二十九日神田明神での記念演奏会は、万全の対策を講じて開催された。まさに師匠の一念である。

文化交流館四階の会場は空中庭園付きで換気は万全と申し分ない。舞台と客席の distance も初めは取れていたがお客様が増えて徐々に狭まってヒヤヒヤもした。しかし今回の収穫はまずオンラインでの出演（三浦先生）ができたこと。これも『関係のお弟子の努力による。途中で画像が固まったり一筋縄ではいかなかったが新しい試みとして素晴らしい。そしてもう一つは決死の思いで出演してくださった花柳千壽文師の美紗の会での最後の『七福神』の舞をこの目に焼き付けることができたことである。

節目となる六十回記念演奏会の開催は布咏師匠にとって強い決意はおありになるものの迷いやお心を痛めることも多かったことと思う。師匠を慕う多くの方々のご協力により無事終了し本当に良かったと思う。神田明神様のご加護もあったのであろう。

災禍の中でも芸事を続けるということの意味と意義

己紗　咏治

十一月二十九日（日）、神田明神文化交流館四階・令和の間にて第六十回「美紗の会」をなんとか無事に開催することができた。まずは師匠をはじめ事前の準備や当日の運営に携わっていただいた多くの方々へ感謝である。もちろん、出演者であるお弟子の皆様も本当にお疲れ様でした。いまさら述べるまでもなく、昨年の初頭からにわかに国内でも蔓延しはじめた新型コロナウイルスは、夏を越しても収束の気配が見えず、それどころか、晩秋からじわじわと感染者の数を再び増加させている（二〇二〇年末の時点で東京都の一日あたりの新規感染者数は千人を突破）。今回の『美紗の会』はそんな不穏な空気がまた拡大し始めたさなかでの開催であった。

思い返せば昨年の春の会も例年であれば四月に実施するところを緊急事態宣言のために七月まで延期となったり、とにかく、新型コロナウイルスに翻弄

苦界ごっこ

川崎　隆章

十一月二十九日。神田の空は朝から明るく晴れ渡っていました。

想えば二〇二〇年は大変な年で、春の発表会もコロナ禍で仕切り直しとなりました。この時は感染予防のために集合写真すら撮らなかったのです。

それから四ヶ月。私たちは疫病流行下での稽古の仕方を学び、七月より少し気持ちを軽くして本番に臨むことができた…ような気がします。新しいやりに慣れただけなのかもしれませんが。

私が学んだことは一つ。『コロナはシャレが通じない』この一言しかありません。言い訳も取りなしも通じない、白か黒か、丁か半か、それがコロナとい

されて続けた一年であったと言っていい。しかし、そうした非常時がもたらした副産物として遠隔会議ソフトを活用したオンライン稽古が定着したり、今回の美紗の会では、会場での演奏が叶わない三浦さんがリモートで出演して唄と三味線を披露するなど、これまでにない新しい取り組みが試みられたことも事実である。『ウィズ・コロナ』のキャッチフレーズではないけれども、第六十回『美紗の会』は舞台と客席との距離に気を使ったり、換気に配慮したり、オンラインでの出演／演奏があったり、まさに二〇二〇年を凝縮したような会であった。

それにしてもパンデミックの渦中で稽古を続けながらしばしば考えたのは、こうした『非常時』に『日常性』を保つことがいかに困難であるか、そして、それがいかに重要であるか、同時に、芸事というものがいかに不安や憂鬱を和らげてくれるかということである。いくら『非常時』だからといっても、人間というものは暑さ寒さをしのいで、飲んで食って寝て…というだけではどうしても精神の充足は得られない。衣食住という生存のための最低限の要件を超えたところにある、感情の機微であったり気分の高揚であったり、文化的な営為というか、創造的な活動がどうしても必要なのだろう。

そんなときにふと思い出すのが、かつて小津や黒澤の映画で名バイプレーヤーとして活躍した俳優・加東大介の著書『南の島に雪が降る』（ちくま文庫）である。戦時中、御生伍長として招集されニューギニアのマノクワリにあるジャングルの中の病院に送り込まれた加東は（当時の芸名は市川莚司）、日々の任務に追われつつも、応召前の経歴を見込まれて芝居の上演を依頼される。上官たちの目論見には愚化する戦局から兵隊たちの目を逸らすため、食糧不足による飢えを何とか紛らわすためという意図もあったのだろうが、そこは兄に沢村国太郎、姉に沢村貞子を持つ芸能一家の血筋である、にわか仕込みの娯楽集団などではない、本格的な劇団の旗揚げを目指すことになる。

当時のマノクワリには七千人もの日本兵がおり、加東はその中から元役者だけでなく元歌手、元脚本家、元三味線弾き、はては元洋服屋から元カツラ屋までをもかき集め、熱帯雨林の中に二百人以上を収容可能な『マノクワリ歌舞伎座』を建設した。加東たちの一座はここで復員船で帰国の途に着く一九四六年五月まで毎日のように芝居の上演を続けたというが、人間は死と隣り合わせの極限状態においてもこうした衣食住を超えた何か『美しいもの』を求めるのである。

停滞感と閉塞感が募れば募るほど、たとえ片時であれ、浮世の憂さから逃れられるものを持っているか否かは重要である。おそらく自分も唄と三味線がなかったら気持ちの余裕やハリがなくなり、どこに向ければいいのかわからないイライラやもやもやを抱えた日々を送っていたかもしれない。私が勤務している大学でも先の見えない不安から心が折れて、休学や退学に至ってしまった学生が数名いる。いつ終息するともしれないコロナ禍の中で、芸事を続けるということの意味と意義を改めて考えた第六十回『美紗の会』であった。

う無粋の驚み。江戸唄の素晴らしさを解いても、陽気な囃子を聴かせても、まるで話が通じない、嫌な相手なのです。しかし、そこで怯まないのが美紗の会で、六十回記念発表会では、途中、舞台の背後に江戸の風情や日本の四季にまつわる映像を投射して夢幻の世界に聞き手を誘いました。また、三浦さんが布咏師匠の伴奏でNooB越しに唄を披露したのは、まるで宇宙の向こうから届く江戸唄の姿を見るようでした。また、換気のため、豪快に外気を取り

込み、お客様は皆、外套を着たまま聞いてくださった事は、感染予防のためとは言え、あまりに申し訳なく思いました。

『そんなに無理してまでやらなきゃいけないのかね』とは、よく聞く言葉。それはわかっています。でも、それを『無理している』と思っていないのですから、やめる理由にはなりません。無理でないやり方で、好きなことをすることに、何の問題があるのでしょうか。私たちはさまざまな演出も、感染予防の工夫も『唄いたい、弾きたい、聴いてほしい』の一途で、楽しみながらあれこれ工夫をしているのです。

それは、私たちの『心』と、それを支えてくれる『江戸唄』を守るためでもあります。唄なんて、歌わなくなればあっという間に消えてしまうのです。録音・録画がいくら残っても、それは本質的ではありません。生きている唄い手・弾き手、生きている聴き手、生きている『唄』の三つが揃ってこその価値なのです。伝統とはいえ、コピーを繰り返すだけでは、必ず本質から外れてゆきます。芸能の記録を生業としている私が言うのも変ですが、どんなにうまく記録できても、その当事者が死んでしまうと、記録されたものも褪せて行きます。人間の心理、精神構造の不思議な部分ですが、そのくらい、生きた人が関わることには大きな価値があると言うことです。

コロナで一度は八方塞がりになりかけたわれわれの江戸唄は、あの日、神田の風に煽られて大きな命の焔を上げました。私たちは江戸唄の歴史の中で『唄を未来に繋ぐ』ひと仕事をできたのかもしれません。

ウイルスという物理現象の前にはヒトは到底無力ですが、私たちはどんな苦しい状況でも歴史に何かを遺す自由を持っています。この閉塞を強い意気地を持ってその突き破ろうとするのは、われわれに与えられた偉大な自由ではないかと思います。

今や、集い、歌うこともできず、逢いたい人にも会えず、ただ、忍従せよとだけ言い続けられている日々。

もちろん、科学の見地から言えば、蟄居が一番安全で、医療にも負担がかかりません。これはまさに『(味も色気もない) 現代の苦界』です。苦界といえば吉原ですが、吉原から味と色気と粋と風情を抜くと、現代の苦界ができあがります。行動を厳しく制限され、相互監視の中、わずか何畳の空間でのみ心を遊ばせる事ができる時代が来たのです。

そんな中、神田でわれわれが見せたあの意気地で『コロナ後に残る粋』を未来に残さなければなりません。そのための『苦界ごっこ』を楽しみたいと思います。そうして、シャレが通じないコロナに、ガツンと一発くらわせてやりたいと思うのです。

あさきゆめみじ

己紗　秋咏

十月三十日、紀尾井小ホール…開演前の客席は、これまで私が経験したことのない静けさだった。

若い頃から生の舞台が大好きだった。なけなしのお金をはたいては、ずいぶん沢山の劇場、芝居小屋に足を運んだ。日常とは別の世界に浸り、酔いしれ、心を遊ばせる…私にとっては至福の時であり、決して手放せない大切なものだった。会場へ急ぐ道、幕が上がるまでの客席のざわめき…それらもまた、私を特別な世界に導く大切な小道具の役目を果たしてくれていた。

それが、このコロナ禍である。客席を一つずつ空けてソーシャルディスタンスを保った客席には、頻繁に「感染防止のため会話はお慎みください」のアナウンスが流れていた。

私たちの仲間、己紗咏扇さんこと閑崎扇ひでさんが「秋にリサイタルを開きます」といつもの優しい声で少し誇らしげに報告してくれたのは、仲間内の忘年会の席だった。新しい年がこれほど厳しいものになるとは、そのときは思いもしなかった。

それでも「閑崎扇ひで第二回リサイタル・扇の会～あさきゆめみじ」の幕は開き、布咏先生と善養寺惠介さんという最高の地方に支えられた美しい舞台は、私を厳しい現実から『イマココニハナイ』特別な世界へと連れて行ってくれた。

幕開けは「鐘が岬」。四年前のリサイタルでは、『茶音頭』で可愛い舞姿を「八島」で勇壮な舞を見せてくれた扇ひでさんは、今度は遊女になって現れた。華やかさの陰にある哀しみや尽きせぬ恋心…指先や袂までがその感情を物語るのだと知った。様々な思いを抱えながらも、その中で生き抜いていこうとする姿は凛として美しかった。

善養寺さんの特別演奏「越後三谷」では、こんなにも激しく激情的な音色をも生み出す尺八があったのかと驚嘆し、「江戸みやげ」では、傾城や越後獅子など八役をも生き生きと演じ分けてみせる舞姿に心が弾んだ。生の舞台の楽しさを存分に感じた。

休憩を挟んだ後は「葵の上」。六条御息所が生き霊となって光源氏の正妻葵の上を苦しめ、ついには殺してしまう凄艶な物語。『源氏物語』に由来する能『葵上』を更に地唄に移したそれは、能のような幽玄さを持って始まった。華やかな宮廷生活を送っていた昔を偲びながら、衰えた今の身を嘆く御息所。その後一転して源氏との恋をつがいの蝶になぞらえ、その女心を切々と訴える。理知的でもあれば情熱的でもある誇り高い女性を、扇ひでさんはしなやかに美しく舞っていた。やがて、理性では押さえ切れない怒りや哀しみが激しい感情となり、心ならずも生き霊となって葵の上に祟ってしまう。布咏先生の唄と三絃、善養寺さんの尺八が劇場を満たしていた。

先日、ある歌人の「情感というのは、まずは体のそちこちで、疼きや震えや揺らぎとして生まれる」という一文が目にとまった。「あ、それだ！」…布咏先生の地唄を聴く度に感じてきた不思議な感覚を言い当てられた気がした。布咏先生の声が低く深く響く。六条御息所の内なる思いが私の中に入ってきて、体が反応する。そして内へ内へと入っていく意識は、己の中に六条御息所を探す。強烈なエネルギーに私の体と心が共振するかのようだった。

舞い終わり、心を込めた拍手が続く中、舞台の中央に立ち尽くす六条御息所が目に焼き付いている。いろは歌の「あさきゆめみじ」の意味には諸説あるが、「もう浅い夢など見るまい」とする解釈も成り立つという。最後の立ち姿に私は御息所の意思のようなものを感じていた。そして、それがそのまま扇ひでさんの、舞の道を歩んでいこうとする覚悟を投影しているようにも思えたのだ。

オンライン朗読 スナックと声の力

己紗　俊咏

山根基世さんの朗読を初めて聴いたのは、三年前、二〇一八年の四月、サントリーホールでのことでした。山根さんが主宰されている朗読サークル「やまねこ朗読会」一期生有志による「ことば食堂 やまねこや」という朗読コンサート。タイトルのとおり、「食」にまつわる文学作品（例えば宮澤賢治の「注文の多いレストラン」とか）を、時折ピアノの演奏が入りながら、何人もの方々が代わる代わる朗読をしていきます。ああ、朗読もいいものだなあ、帰りにこのイベントに誘ってくれた進藤晶子さん（このコンサートの実行委員長を務められていました）にお礼を言わなきゃ、と思いながら迎えたその日の最後の朗読。それが山根基世さんでした。

山根さんが朗読されたのは、「妻が椎茸だったころ」という泉鏡花賞を受賞した中島京子の短編集に入っている作品でした。妻を亡くした男が、妻の残したレシピどおりに料理を作るというエピソードなのですが、山根さんの抑制の効いた、それでいてしっかりと胸の奥まで伝わってくる声に、一瞬にして物語の世界に引き込まれてしまいました。まさに別次元の語り。これほどまでに人の語りに魅せられたことはありませんでした。

山根さんが読み終わる頃には、目頭が熱くなり涙が堪えきれなくなっていました。ふと周囲を見回すと、それは自分だけではなく多くの人が目を潤ませていました。人の「声」の持つ力を知った瞬間でした。

その山根さんに、昨年、あろうことか森鷗外の「雁」を朗読いただきました。

上野、本郷、神田など東京都心部東側のエリアの文化資源を活かしたプロジェクトを進めている東京文化資源会議というのがありまして、その中で、池之端・仲町や湯島界隈の活性化イベントを仕掛けているのが上野スクエア構想というチームです。昨年、そのチームが仕掛けるイベントのひとつとして「オンライン朗読スナック」というものを企画しました。

コロナ禍の中、リアルな店舗に人を集めるのは難しい。そこで逆にスナックの空間をオンラインでお茶の間に届けようという発想で企画したもので、空き店舗が目立つこの界隈のスナックの再利用と活性化を目指したものです。いくつもの文学作品の舞台となった上野・池之端に相応しいもの、ということでかつての文豪たちの作品の朗読をやろうということになりました。

では、どんな作品を朗読しようか、池之端・仲町になじみの深い作家としては、泉鏡花、谷崎潤一郎、江戸川乱歩、池波正太郎などなど数限りなくいます。進藤晶子さんと相談を進め、そんな中から森鷗外「雁」に行き着きます。無縁坂、不忍池、池之端・仲町、湯島、本郷、すべての地名が作品には登場し、これ以上趣意に沿ったコンテンツはありません。

そして「雁」の世界と言えば、われらが師匠のことが頭に浮かぶのは、弟子であれば当然のことです。山根さん、進藤さんの朗読に、師匠に唄と三味線を添えてもらおう。欲深い上に罪深い自身の野心がむくむくと起き上がります。贅を極めた朗読と唄のコラボ作品はそうやって制作が始まりました。

「雁」は文庫本で百四十ページほどの作品ですが、全編読むと五時間ほどかかります。そこで、一時間ちょいくらいの時間に縮めるため、途中を大胆にカットし、お玉と岡田のエピソードのみにフォーカス。カットした部分はあらすじにまとめ、そのテキストを効果映像をつけて、朗読の間に挿入。唄は師匠に選んでいただき、こちらも四曲を収録して作品に織り込みました。見事な選曲で、「雁」の世界にさらなる立体感をつけてくれました。圧巻は、エピローグとして唄っていただいた「しのばずの女」。上野・水月荘の「舞姫の間」で聴いて以来の曲でしたが、この朗読作品を締めるに相応しい唄と三味線でした。

朗読作品の視聴公開期間は終わってしまいましたが、この春に、音声部分だけを再編集してポッドキャストで配信したいと考えています。ぞくっとするような作品に仕上がっていますので、それまでどうかお待ちいただければと思います。

■たより 第93号
発行者　美紗の会
編集責任者　照沼 太佳子
デザイン　近藤 幹則

■美紗の会
主宰　西松 布咏
稽古場　港区白金台三-二-二
白金台プレイス 三階
電話　（三四四一）一七二六
（五四四七）一二四一一
E_mail：nfue@soleil.ocn.ne.jp
URL:http://www.misanokai.com/